

[翻 訳]

モリス・フィッツパトリック著
聖コロンバの申し子たち (2)

市 川 仁
ジョン・ドーラン

ジョン・ヒューム

ジョン・ヒュームは数分遅れてデリーのあるホテルのロビーにあわただしく入ってきた。「おしゃべりの相手は誰だい」とポケットに手をつっ込んだまま、なじみの知人と挨拶を始めている。私は飲み物を注文し、空いているテーブルを指差す。彼は立ったままではいるが、二人のご婦人がその席の近くをうろろうしていると、「その席はふさがってますよ」とはっきり言う。二人は笑い、ノーベル賞受賞者に——たとえそれがおしかりであっても——話しかけられたことを名誉だと思っているようだ。彼もまたやりとりを楽しんでいるのだ。

彼は、1998年にオスロでノーベル賞の舞台に立ったときの恰幅のいい姿と比べると縮んでいるが、今でも演壇に立って、1947年の教育法の影響で北の状況が一変した事情について述べることができる。「この世の大きな財産は人間です。経済を評価する基準は人間をいかに使うかなのです。私はローズマウント小学校に通いましたが、イレブン・プラスの準備は十分にしていました。1947年以降洪水のように押し寄せる学生たちを収容するために、聖コロンバは急遽小屋を建てなければなりませんでした。」

ヒュームが言ったように、「結局状況を変えたのは——もちろん、そのためには相当な時間がかかりました。そのようなことは一週間や二週間では変わりませんからね——新しい教育制度だったのです」（『王国を求めて』）。

マイヌート大学で修士号をもらったあと、ヒュームは聖コロンバに奉職することになっていた。ヒュームは聖コロンバで、1960年から1967年まで、歴史とフランス語を教えた。彼はよくナショナリスト党のパディ・ゴームリーを呼んで聖コロンバで講演をしてもらっていた。ナショナリズムのほかに、ヒュームは生徒たちに消費者信用組合のことを教えたが、それは考え方を変えさせようというよりも情報を与えるということだった。

コミュニティのための働きを高く評価するいかなる価値基準から見ても、ヒュームは模範的な人物である。コミュニティの発展に対する懸念があった

らばこそ、彼は専任教員の職をしりぞいたのだ。聖コロンバのもう一人の若い教師、ケイサル・ローグは、ヒュームの同僚だったが、授業の合間に暖房用のラジエーターの前でヒュームと話をしたことを覚えている。ヒュームは政治の状況に変化がありうると確信していただけでなく、その変化を生み出すようなことを何かしなくてはいけないと考えていた。

政治の世界が新しい展開を見せようとしているときには、指導者の資質が格別に重要となる。この本に登場するインタビューに応じてくれた他の人たちとは違って、ヒュームは、グレンブルック・テラスで会が開催されたウルフ・トーン・クラブの一員ではなかった。父親からよく「旗は食べられないぞ」と聞かされていただけに、ヒュームの政治的なスタンスは若いときから实用主義的な傾向が強かった。そのために和解できそうにないものを和解させることもできたのである。血祭りにあげるというナショナリストの神話は、ヒュームがしきりに唱える平和的な手段の有効性、絶対に譲らない彼の非暴力の姿勢と真正面から衝突した。

ゲリマンダリングのためにデリーはひどく不公平な町になった。しかし、多くのユニオニストは、デリーのギルドホールを不公平な場所だとは思っていなかった。制度そのものはまったく自己永続的なものだった。多くの人たちが、カトリック教徒が職に就かないのは——現在の政治体制にその原因を求めるのではなく——大家族のうえ仕事への関心がないために社会的に一人前となっていないからだと思っていた。

ヒュームが残した大きな業績のひとつは、ボグサイドに信用組合を設立したことである。それまでは、デイリー神父が記憶しているように、ボグサイドの多くの人たちは高利貸しのなすがままにされていた。ヒュームはそのような文化に終止符を打ち、それこそが自分の町に対する最も重要な貢献のひとつだと思っているが、まさにその通りである。ボグサイドは今こそ独立した信用組合を受け入れるときだった。何人かの名士が彼らのためにすでにその型枠を作っていたからだった。たとえば、パブの経営者であったヒュー・メイリーは、自身で信用組合の役をかっていた。彼は客が給料を飲んでしま

うことを許さなかった。(メイリーの店は女性の入店を禁じるパブの最後の砦となっていた。後に少し緩めて——女性もパブの女性専用コーナーでなら飲めるようになった。)主義を持った男だったので、店内での飲み過ぎを誰にも絶対に許さなかった。男たちはまた、特に金曜日の夜は、ケルティック・バーでも飲んでいて。金曜日には、長男たちが、母親の代理で、窓口で父親の給料をもらいにきていた。そこも間違いのないちゃんとした店だった。パブの経営者ジョン・ブラドリーは夫の給料の大部分が必ず妻の手に入るようにした。

これは強調しても強調しすぎることはないのだが、公民権運動が最初にとったあるいは好んで選びとった政治に対するスタンスは、抗議ではないということだ。公民権運動家の多くの人たちが、1960年代にヒュームが主役を務めたデリー住宅協会の支持をしてくれた。ヒュームが新しい公営住宅のための予算をやりくりして計画の段階に入ったとき、市議会がゲリマンダーを延長して邪魔をした。代わるべき方法がないと感じて、彼らはその不正を訴えるために街へ出た。

デリーの地元でのヒュームの先取的な取り組みは1968年にたちまち国際的な意味を帯びた。幻想から目覚め、公民権を奪われた大群衆が今、街に出て、公民権を求める抗議活動に乗り出した。1968年から、プロテスタントの中産階級がそれまで住んでいた住宅地区から逃げ始めると、カトリック教徒がたちまち入れ替わりに住み始めた。

フィル・コルターがインタビューで触れたように、1960年代までナショナリスト党の既定の立場は反分割だった——会議中にボイコットしたり、北アイルランドの適切な政治体制に反対したりした。ヒュームが設立に尽力し、後に党首を勤めた社会民衆労働党(SDLP)はナショナリスト党の再結成だったが、憲法主義的ナショナリズムに対する考え方は根本から違っていた。SDLPはエディ・マカティアのナショナリスト党が現代化したものであるが、1960年代後半までには人気を失い、人びとを引っ張っていくほどのカリスマ性も欠いてしまっていた。歴史の展開の中でヒュームこそまさにぴっ

たりの人物だった。彼は憲法主義的ナショナリズムに信頼性を取り戻した。当時、若さは強い武器だった。秀才にはめったにないことなのだが、ヒュームは信用組合と関わっていたころから政治に誘い込まれた。彼は無償の教育を受けた人たちの先頭に立った。彼らは非暴力主義で権威に立ち向かい、もはや無視できない存在となった。ヒュームのアプローチはボイコットとは反対のものだった。会議の席を蹴って出るのではなく、座り込む方法を取った。それは、対抗する両陣営は交渉の場に出て来るべきだということを強く要求するものだった。それはまた暴力の脅威を前に論理的根拠を持って立ち向かうことだった。逆境を前にしてそれを跳ね返すヒュームの粘り強さの好例として、サンニングデール協定の交渉での彼の行動がある。ヒュームとSDLPは、1973-74年にサンニングデール協定に合意をもらうように、イングランド、南北アイルランドの五つの政党を昼夜兼行で説得しているとき、さらに頭の痛いことに、ユニオニストによる州規模のストライキに対応しなければならなかった。ユニオニストの過激派は、北で合意された理想的な協定を覆そうとしていた。(この協定は結局20年間の暴力を経た後そのままの形で1998年の聖金曜日に批准された)。ヒュームは妥協案を議題に載せたが、それを押し通す覚悟も決めていた。マッキャンは性急にもSDLPを「中年の、中産階級の、中道の党」と決めつけていたが、それに反証するなかで、ヒュームはサンニングデールの成功を固く決意していた。デリーで、ユニオニストのストライキによって水道が止まり、下水道が使えなくなると、「僕はロイヤル・アヴェニューが排便に埋もれるまで座り続けるつもりだ。そうしたらユニオニストがどんな人間か分かるだろうし、みんながそれを分かったらどっちが勝つかは決まっています」とヒュームは言った(『ジョン・ヒューム——伝記』ポール・ルートリッジ著、ハーパー・コリンズ、1997年、134ページ)。ディーンは、サンニングデール合意に対する手に負えないユニオニストの抵抗に対してハロルド・ウイルソンが立ち向かおうとしなかったことを「偏狭な信念も報われることがあるという不吉な兆候」(『アイルランド研究』、日本、第21巻)だと見なししている。歴史には刻まれるものだ——サンニングデールは採択

には至らなかったが——ヒュームにとっては最高の時だったと。しかしながら北における正義を実現するもっともよい機会は無駄に終わってしまった。

ヒュームは1979年から SDLP の党首を務めたが、1970年の創立に手を貸したとき、関心の中心は社会改革だった。デリーでは住宅政策の改革に対する要求が特に際立っていた。SDLP はナショナリスト党よりも光彩を放っていて、ついにはそれにとって代わったのだが、それは、新しい血が、新しい教育を受けた世代に語りかけるアジェンダを主張したからだけではなく、選挙民の目の前でナショナリズムよりも社会改革を優先するということを明らかにしたからである。

(選挙ではこれまで何年もの間、社会的改革がイデオロギー的主張より勝っている。労働党の偉大な指導者であり思想家のジェイムズ・コノリーも、数十年の政治活動を通じて分かったのは、地球規模の社会主義がいかに大事であっても、彼の支持者にとって決定的に必要なのは、アイルランドの国という枠組みの中での社会改革であるということだった。彼は自分でアイルランドが独立共和国だと宣言したため、1916年にイギリス軍によって椅子で処刑された)。ヒュームは最初から支持者の優先課題をつかんでいた。SDLP がデリーを始め各地の人たちにあれだけ支持されたのは、長年人びとが待ち焦がれていたニーズに対応しようとしたからである。次の一節で、ディーンはヒュームの一貫した選挙での成功と、そのアプローチがイーモン・マッカンの社会主義的アジェンダよりずっと人気がある理由について語っている。

人民民主主義党 (PD) の実情はこのようなものだ。彼らはますます現実離れして、ますます教条主義的になっている。負けることについては巧みな大衆の支持なしには、マッカんとともに飢えてしまう。ジョン・ヒュームだったら、北のどの選挙区でも、彼らの連合候補陣に勝てるだろう。彼の意欲的な中庸策を一笑に付すことはもちろん容易なことだ。しかし、それはマッカんと PD の党员が自分たちの行動を象徴的な範囲にとどめ、権力の座に辿り着かないことを一種の純粹さとみなす限りに

おいてなのである。(「優柔不断の者と両生類」『アトランティス』1972年、10ページ)。

そのような成功はヒュームの現役時代を通じて続いた。ディーンのコメントはまた、ヒュームが大統領選などのような全国区の選挙に立候補していたとしても当てはまることだったのであろう。20世紀の後半に地盤を築いたときのヒュームほど支持者を得られた政治家は、おそらくアイルランドの全島にはいなかった。北の問題に対して「積極的な中庸策」を南で押し進めたのもヒュームだった。南がIRAに背を向ければ向けるほど、共和国でのヒュームへの潜在的支持は増えるばかりだった。

聖コロンバの卒業生は母校で交渉術を教わって、それをウエストミンスター、ワシントンなどどこへ行くにも持っていった。特にヒュームは性急な明瞭さを備えていたが、彼の選挙区の人たちの苦境に対する無関心さに出会うと、それが顕著に現れた。次の対話は、ヒュームが1972年1月23日にマギリガン・ビーチでイギリスの兵隊の一人に行った抗議の記録である。(なお、これは流血の日曜日の一週間前のことである)。

Hume : あなたは今日集まっている人たちへの部下の対応が誇るべきものだと思いますか。

Soldier : この群衆は立ち入り禁止区域に入ろうとしていたのです。

Hume : ゴム弾で撃ったんですよ。みんなは向こうに行こうとしていただけですよ。我々の指導者たちは話し合いをするつもりだったのです。でもここに来てもないうちから撃ち始めたのではないですか…私だったらその部隊のふるまいをととても恥ずかしく思いますよ。群衆に向かって発砲を始めてしまったのですから。それもまったく非武装の人たちにですよ。

Soldier：そこでは行進は許されていません。

Hume：どうしてですか。

Soldier：禁止区域ですから。

Hume：ここはあなたの土地ではありません。そんなことは言えないんです

…

Soldier：あなたの政府の命令です。

Hume：「叫びながら」誰の政府ですって。

Soldier：北アイルランドの政府です。

Hume：それは我々の政府じゃありません。だからあなたはここにいるのですよ——我々の政府じゃないんですから。

(アイルランドの議会ストーモントはそれからしばらくしてウェストミンスター（英国議会）によって閉会された)

1996年1月にビル・クリントンは——デリーのギルドホールにおいて——「公民権を求めて闘うアイルランドの精力的な闘士で、非暴力主義をもっとも雄弁に語るジョン・ヒュームの故郷にいるのは光栄です」と言った。ヒュームがノーベル賞を受賞したとき、シェイマス・ヒーニーは次のような文を書いた。

「デリーの聖コルンバでジョン・ヒュームと知り合った1950年代当時、彼はすでにこの新たな高貴たる賞に冠されるだけの資質を見せていました。頼りがいがあって首尾一貫した人物で、原則をくずさないはっきりした芯のある印象を与える人でした。(『アイリッシュ・タイムズ』1998年10月17日)。

立ち向かったどんな舞台においても大きな成果を上げたヒュームの名が歴史に残ることは間違いない。

MF：あなたの生まれ育ったところには、1947年の教育法とその選抜試験であるイレヴン・プラス試験がどんな影響を与えたのですか。

JH：イレヴン・プラスの導入によってあの地域は色々と変わりました。この学校も変わりました。というのは、イレヴン・プラスが導入されるまでは、この学校に入学できるとしても実業家や専門職の息子たちだけだったからです。イレヴン・プラスのおかげで、建物の増築の関係で学校の規模の拡大にもつながりました。イレヴン・プラスが実施された最初の年に合格できたのはとても幸運でした。

MF：個人的にはどんな影響がありましたか。

JH：1才年上だったらイレヴン・プラスは受験できず、教育も受けられなかったことを考えると、本当に運がよかったのです。教育を受けた人はみなそうなのですが、教育は私の人生も変えました。もちろん、小学校もとても大きな位置を占めました。どこの国でも、教育はもっとも重要な課題のひとつです。世界で一番貧しい国々、いわゆる発展途上国が、共通して本当の教育制度を欠いているのは偶然の一致ではありません。教育の存在価値は疑いのないものです。過小評価は絶対すべきではありません。

教育、つまり高等教育があらゆる階層の人たち、特に労働者階級の人たちが受けられるようになったという事実がコミュニティーを変えたのです。

MF：あなたの世代が受けた教育はデリーの事情をどのように変えましたか。

JH：後になって、この町を良くして目の前にある非道な差別に終止符を打つために市民権運動を立ち上げたのは、まさにその世代でした。当時、

ユニオニストはデリーの人口の30%しかいなかったのに、ゲリマンダーというシステムによって町の支配権を握っていました。公民権運動はそれを取り上げて、変え始めたのです。

MF：どうして公民権運動はこのデリーで特に顕著だったのですか。

JH：公民権運動がここデリーの町でとても強かったのは、北アイルランドで、デリーが公民権をもたない最悪の町だったからです。いってみれば北アイルランドの不公平さの最悪の例でもありました。選挙制度はユニオニストの権力維持を保証するように作られていました。町は選挙区に分けられていましたが、一番大きい選挙区は大多数のカトリック教徒が住んでいたところでした。ユニオニストたちは他の二つの選挙区に住んでいて、いつも選挙で勝っていました。カトリックが大半を占めていましたが、それに見合った議席は持っていませんでした。

MF：1947年の教育法は1968年の公民権運動の直接のきっかけとなったと言っていていいですか。

JH：そうですね、1968年の公民権運動には——マーティン・ルーター・キングなど——アメリカの公民権運動の存在が大きく影響しています。でも、教育制度の変革がなければ、同じように支持はされなかったし、また同じような指導者が現れなかったでしょう。

市壁の外に発展しつつあったデリーの初期のころの歴史について——「市壁の向こうのデリー」をテーマに——論文を書きました。それで修士号をとりました。

MF：そうでしたね。読ませていただきました——大変おもしろかったです。南北の国境線が引かれたことによってデリーの経済がだめになったこ

とについて書かれていました。その点についてもう少し詳しく話してもらえますか。

JH : 国境線が引かれたときにデリーは大変な損をしました。なぜなら、デリーの自然の後背地はイニシュオーウェン地方で、デリーはその地方の首都だったのですが、国境線が引かれたことによって、その全部を失いました。国境線ができた当初、北西地方はアイルランド全土でもっとも貧しくて、失業率が高かったのですが、それは偶然ではなかったのです。

MF : 聖コロンバで受けた教育はその後のあなたの人生にどれだけ役立ちましたか。

JH : 大学に特待生として入学ができて、フランス語と歴史で学位を取りましたが、その科目が聖コロンバで熱心に教えられていたおかげです。

MF : 人格形成という点で聖コロンバからどれだけ影響を受けましたか。

JH : 聖コロンバに行っていなかったら、世の中で成し得たようなことはとてもできなかったでしょう。

MF : 英語学の先生としてショーン・B・オケリーはきわめて強い影響力がありましたね。

JH : オケリーさんは英語の先生として名声がとても高く、立派な英語の先生でした。それはシェイマス・デーンやシェイマス・ヒーニーのような教え子の業績をみれば明らかです。

MF：ご両親の世代は教育の機会に恵まれなかったようですね。

JH：我々の親の世代は実際ほとんど教育を受けられませんでした。私の父は失業していましたが、とても有能な男でした。銅プレート書き屋だったので、戦争中はデリーの食料配給局で働いていました。デリーの配給手帳の印字はすべて彼の筆によるものでした。父のところには人がよく訪ねてきましたよ。手紙の代筆をしてあげたり、問題解決への道を示してあげたりしていました。私は貧しい環境に育ちました。だから、小さいときから人々の抱えている問題はとてもよく分かっていたいました。

MF：聖コロンバで教鞭を取っていましたが、どうして辞めたのですか。

JH：そうですね、私が教員を辞めたのは、地元の開発に関して考えがあったからです。信用組合の設立運動に深く関わっていたのです。フォイル川はヨーロッパ全体でもっとも大きい鮭の産地の一つだったのですが、我々の鮭は薫製にするために外国へ輸出していたのです。でも、地元で薫製作業をするべきだと主張しました。それで、友人の一人マイケル・カナヴァンが「その通りだ、我々でそれを始めよう」と言ってくれたので教員を辞めました。

MF：アイリッシュ系アメリカ人との関係を少し話していただけますか。

JH：アメリカで非常に強い関係を築くことができました。エドワード・ケネディ、議会議長のティップ・オニール、ダン・モイニハン、ヒュー・ケリーと連絡がとれてとても親しい関係を持つようになりました。この四人は、北アイルランドにおける公民権獲得をととても強力に支持してくれたので「四人の騎士」と呼ばれるようになりました。

MF：北の問題は非暴力によって解決できるとずっと信じていましたか。

JH：問題の根本がコミュニティーの分裂の場合、その解決に暴力が出る幕はありません。その場合の暴力の役割は溝を深めることだけです。公民権や平等のために運動をしているのであれば、生命権というもっとも基本的な権利を脅かす手段など使えるのでしょうか。

MF：ノーベル賞を受賞したときはどんなお気持ちでしたか。

JH：ノーベル賞を与えられたのは大変光栄でしたが、それはノーベル賞選定委員会によるわが町の平和回復への強い国際的支持宣言でもあったように思います。

MF：あなたはいつか触れていますが、ストラスブールにいたとき、ドイツ人とフランス人が仲直りした様子に感銘を受けられています。それについてもう少し詳しく話していただけますか。

JH：欧州議会の議員としてフランスのストラスブールに初めて行ったとき、散歩で橋を渡ってストラスブールからドイツのケールへ行きました。橋の真ん中のところに立ち止まってしばらく考え込んでいました。そして「おやおや、こっちはフランス、目の前はドイツなんだ」とつぶやきました。30年前の第二次世界大戦の終戦のときにここに立って、「もうすべてが終わったから心配しなくていいのだ。30年もすればみんなは統一されたヨーロッパで一緒になるからね」なんて考えていたら、たちまち精神科医の世話にならなければいけなかったでしょう。しかし、その通りになったのです。世界史のどこを見ても、ヨーロッパ連合こそは紛争解決のもっとも成功した例だと思いました。だから研究する必要があるのです。そして、ヨーロッパ連合が基盤としている原

理を見ると、それらは世界のどの地域の紛争でも実行されるべきものなのです。ヨーロッパ連合が基盤とする三つの原理は、すなわち、北アイルランドにおけるグッド・フライデー合意の三つの根本原理と同じです。

第一の原理は、お互いの違いを認め合うことです。例えば、その違いが人種、宗教、国においても認めるということです。第二の原理は機関の設立です。ヨーロッパを見ると、どの国も参加できる閣僚評議会があります。欧州委員会も然りで、すべての国が参加しています。そして第三の原理は、共通利益のために共に努力することです——それは社会経済的発展のためなのです。言い換えれば、血ではなく汗を流すことです。それによって何世紀にもわたって残ってきた障壁を取り壊すことが出来るのです。両コミュニティの独自性が十分に尊重され、そのコミュニティが両方ともに十分な役割を果たせるような形で機関が作られるようにするのです。(それは比例代表制によって確かなものになります)。その努力の積み重ねによって一、二世代の内には、過去のすべての障壁が取り壊され、合意と、違いを認め合う精神に基づいたまったく新しいアイルランドが生まれることに、疑いの余地はありません。

MF : 1973/74年のサンニングデール合意について話していただけますか。どうして認められなかったのでしょうか。

JH : サンニングデール合意は DUP 党とシンフェイン党の反対によって不履行になってしまいました。しかし30年後改めて合意交渉に取り組んだとき、問題は変わっていなかったため、SDLP の解決案も変えませんでした。結局グッド・フライデー合意と瓜二つのものになったわけです。グッド・フライデー合意をまとめたその日にシェイマス・マロンが言ったように、まさにサンニングデール合意の強化学習版のよう

なものでした。グッド・フライデー合意を実行している現在の人たち
を見てください。当時のサンニングデール合意に反対していた党です
よ。

シェイマス・ヒーニー

ヒーニーのふるさとに行つて、写真に納められる銅像や彼に関する記念すべきものはないかと尋ねてみた。「あら、彼の兄弟と話をしたいのね」とある女性に言われた。何度か交渉を重ねた後——ほんのわずかな時間だが——ヒーニーの兄弟に会うことができた。すると、彼はもう一人の兄弟の名前をあげてその人物に聞くようにと言われた。彼はその兄弟は「よくしゃべる男」ということだったが、会ってみると、紳士そのものだった。ヒーニーのタウンランド（故郷）とその地方を訪ね歩いてみると、ヒーニー一家は1950年代までジム・エヴァンズの家に向かいの家に住んでいたことが分かった。それは弟のクリストファーが2月25日——寄宿生のヒーニーにとっては「中間休暇」——に車にはねられて死んだ十字路のすぐそばだった。それから左に折れてでこぼこ道を進んでいくと、昔ジプシーのシャイヴァー家が住んでいたところがあった。村の人たちは、彼らに対して親切に手を貸すようなこともなければ、それほど意地悪でもなかった。十字路を右に折れるとすぐに右手にヒーニーが通っていたアナホリッシュ小学校がある。カースルドウソンというプロテスタントが優勢な町が近くにあつて、その町の中心部からちょっと外れた家並に、ヒーニーのおばあさんの家がある。ヒーニーはカースルドウソン近郊のモスポウンのトゥーム・ロードに生まれた。一家の農場はモスポウンにあり、タウンランドはタンピアーンだった。ヒーニーの父親、パディ・ヒーニー（1910-86）は60エーカーの土地を相続すると、1954年2月にベラヒーに引っ越した。ベラヒーは、その地方の他の町に比べてカソリック色が濃かった。私はヒーニーの詩「反対側」に登場する彼の生家に向かい合っているプロテスタントの農家を写真に撮った。

ヒーニーが初めて教育を受けたのはこのような環境の中だった。アナホリッシュは建前上では共学だった。しかし、塀の中に入ると、男女は別々に教えられていた。また宗教上でも分けられていなかった。この学校の構成については今回のインタビューで触れられている。デリー市のボグサイド

は、治安部隊に悩まされていたために当然政治意識は高く、そのためイレヴン・プラスが及ぼす影響はもっと早く認識されていた。イレヴン・プラス試験について強調すべきことは、当時のアイルランドの教育に対する考え方によく見られたように、受験生の選考をとっても恣意的に行っていたということである。当時のアナホリッシュの生徒だったある男性と話をした。彼はイレヴン・プラスの受験勉強が行われている教師用の部屋マスターズ・ルームではなくて別の教室だった。「母が先生のところに行つてこう言ったんですよ。『息子をイレヴン・プラスの教室に入れてください。駄目もとでお願いします』」。教師がイレヴン・プラスの受験で白羽をたてていた5人の生徒はみな落ちた。しかし彼だけは受かった。彼は、よく振り返つては、自分にとってフェアだったが彼らにとってはアンフェアだったのではないかと考えている。

登校途中で、ヒーニーは友達とよくこんな歌を歌った。

長い階段を上り 短いロープを伝いおりて
キング・ビリーなんかくたばっちまえ ポープには祝福を

それに対してプロテスタントの子どもたちはこんなふうに応えたものだ。

バチャバチャと聖水をはね散らし
カトリック教徒をみんな追い散らせ
それがうまくいかなければ
やつらを二つに切り裂いて
赤と白とブルーの色に
塗ってやろう (『先入主』、フェイバー・アンド・フェイバー、1980)

ヒーニーのまわりの年寄り、8歳と9歳の彼と彼の仲間の男の子を「学者さん」と呼んでいた。ヒーニーの地元の年寄りはみな「おまえさんは勉強

しに行くんだね。ペンは鋤よりも軽いよ」と言った。「シェイマス、おまえは学のある人間だ…」とはいかにもアイルランド的である。前の世代のほとんどの人たちはその年にはもう学校にいなかった。イレヴン・プラスがすべてを変えたのだ。それによって、グラマー・スクールに入学し、大学に入学し、それまでは埒外にいた人びとに知的職業の機会が開かれるというように、次々と機会が生み出されていった。

ヒーニーが聖コロンバに入学した最初の日、彼の母親は帰宅すると「リアム・ドネリーと相部屋よ」と言った。リアムはカースルダウソン出身のこざっぱりした「かしめで打ち固めたような坊ちゃん」だったが、二人はそれまで顔を合わせたことはなかった。車が普及する前の当時では人びとの行動範囲は狭かった。ヒーニーの母親は一週間おきに、聖コロンバのヒーニーのもとに差し入れを送った。寄宿生たちはケーキやおいしいお菓子の差し入れを互いに分け合っていた。それで荷物が届かない週には寮の友達に分けてもらえた。

聖コロンバの入学試験の日に、ヒーニーは隣に座った少年から「ここに来られなかったらどこに行きたかったの」と尋ねられた。ヒーニーはぶっきらぼうに「家だよ」と答えた。それでも、寄宿生は故郷から離れて何とかやっていかなければならなかった。彼らは自宅通学の生徒が入っていけないような縄張り意識のようなものを作り出していた。町の生徒は寄宿生の彼らを、乱暴で手に負えないよそ者と見なしていた。「彼らの言葉は一言一言が最後は握りこぶしだ」とある町の生徒は思い出して語っている。寄宿生は、ダングロー、ポリバフィー、デリー、ファーマナなど州のあらゆるところからやってきた。育ちも実に様々だった。ヒーニーは時に「アイリッシュダンスの踊りの会の進行役」に選ばれてもいた。

学校ではヒーニーの優秀さは——眠たげで唇からめったに消えることのない笑みを浮かべた——彼の態度とは対照的な印象を与えた。彼は数学と科学に才能を見せたが、聖コロンバの人文へのこだわりこそが、ヒーニーとその他の生徒たちを文学の道へと向かわせたのだと思う。彼が60年後に生まれて、今日の聖コロンバに通っていたら、数学者か科学者になっていたかもしれな

い。聖コロンバは、科学を（今日の聖コロンバの場合はそうではないだろうが）ある程度見下していた。これは科学（臭い学問^{ステインクス}）よりも古典を重視していたイギリスのエリート校の伝統をもってきたものである。科学の設備はとても貧弱だったし、教授法も機械的な丸暗記で、赤いリトマス紙はアルカリ性では青になるといった調子だった。どうしてそうなるのかについて生徒が理由を教えてもらうことはほとんどなかった。

聖コロンバでの文芸重視に従って、S. B. オケリーはヒーニーのエッセイを他のクラスに持って行って、生徒に読み聞かせていた。ヒーニーは英語だけでなくラテン語でも常に輝かしい才能を見せていた。彼の——クリスマスと夏にもらう——成績表には80-90パーセントとなっていた。少し苦手な科目は美術だけだった。

男の子たちがイレヴン・プラスを受験するときはまだ小さな子どもで、中等学校の準備などまったくしていなかった。聖コロンバでは規律は厳しく、ルールを知らないこと自体が罪だった。寄宿生は毎晩自習室で4時間も過ごさなければならなかったので、家に山ほどの手紙を書いた。（ヒーニーは今でも手紙をたくさん書く）。ある寄宿生が私にこう語った。

今では家に宛てた手紙を読んだら屈辱的な気持ちになるでしょう。見たくもありませんよ。でも、あの6年間は地獄そのものというわけではありません。学校は、ある点で、家でもスパルタ的であったという事情を反映していましたからね。

ヒーニーはソビエト連邦を訪れたとき、1940年代のデリーを思い出したという。当時、靴は手に入ったが黒一色のみだった。物資は乏しく、贅沢品を持っているものなど誰もいなかった。多くの寄宿生は聖コロンバで初めて紅茶を味わったときのことを話す——実にまずいものだったのだ。だが卒業する頃までには、それに慣れてしまった。

マイケル・カッソーニ、パディ・マラーキー、シェイマス・ディーン、シェ

イマス・ヒーニーの4人の生徒は、1956年に特別クラスで最終学年を繰り返すことになった。厳密に言えば、彼らは大学に行くのに十分な年齢に達していたが、親や先生はもう一年間学校にいて勉強したほうがいいと思っていた。(翌年も奨学金をもらうことができるということもあった)。英語には別の講義内容があったので、彼らはショーン・B・オケリーの特別クラスに出席した。これは40分授業のクラスで週3回から5回あった。この授業がヒーニーに後々までも影響を与えた。

この授業では、ジョン・クレアの詩にある“coof”(まぬけ)という単語が使われるようになっていた。それは「愚か者」のことを指す言葉になった。彼らはイエイツの詩を何編か読んだが、学校では一般的にアイルランド文学は英文学よりも価値のないものと考えられていた。ジャック・ガラハーというもう一人の英語の先生は英語の正しい発音を教えることを得意としていた。彼はよく「唇と舌先を歯でかんで」と言ってはっきりと発音していた。

寄宿生は共同生活を通じてお互いを知るようになっていった。ある寄宿生の記憶ではヒーニーはとても根のある人間だった。

一生を通してあんなに変わらない人は他に知りません。彼は自分の尺度を持っています。彼はたたいてもびくともしません。また彼ほど記憶力のある人間に会ったことがありません。

ヒーニーが5年生だった1955年に、弟が聖コロンバに入学した。ヒーニーは弟の盾となった。その後6年生で、学校の売店の担当と監督生を務めた。(ディーンは通学生の監督生だった)。ヒーニーが最初の数年間をそうしたように、一年生の多くが狭い仕切り部屋で寝起きしなければならなかった。ヒーニーの弟は、ヒーニーとともにブライアン・カフェリーという生徒と同室だった。

私には——兄という——最強の防波堤がありました。数学に加えて、フ

ランス語、アイルランド語、ラテン語、歴史、英語と、Aレベル（大学入学資格を得るための上級課程）の科目を5つもとりました。最終学年の5年生の終わりには16歳になっていました。大学の奨学金をもらうためには平均65点が必要でした。教頭に呼ばれて、もう一年残ってから受験したら何点取れるか聞かれました。それで私は、75点ぐらいは取れるだろうと言いました。でも80点を目指すように言われました。案の定74点か75点ぐらいでした。国費奨学生になるには80点必要でした。

ヒーニーの弟は1961年に、17歳で初めて大学に行ったとき、「ベルファーストに行くのは初めてで、シェイマスが車で乗せていってくれた」。

聖コロンバでは、社交性よりも知的優秀性の方が重んじられた。「社交の面では、僕はまったくどうしようもない人間でした」と、当時の監督生だった人が振り返って語っている。（その監督生の功績は、図書館での体罰を廃止したことだった）。上級生の監督生が土曜日に図書館に集まって、念入りに選び出した生徒に体罰を見舞っていた。時には、上級生の監督生が、ふざけ回っていた二人のうちの片方にだけ体罰を与えるということもあったが、それはもう片方は「友達」や親戚だったからである。親によっては子どもに絶対に手を出さなかったのに、どうしてそれを教師に許すだろうか。聖コロンバの暴力は陰で行われていたわけではない。生徒に宇宙の秩序の何たるかを教えるためだった。水は低きに流れ、人生はつらいもの。身を以て覚えなさいということだった。

クィーンズ大学に入学すると、ヒーニーは、ベルファーストのケイブル・ストリートのB&Bに週7ポンド6シリングの家賃を払い、しばらくの間、もう一人の聖コロンバの卒業生ピーター・ガラファーとシェアをした。

クィーンズ大学では、ディーンとヒーニーを含むグループはゲールタハト（ゲール語使用地域）に行った。後にこの本のインタビューで、ヒーニーはこの旅の経験を通じて一個の人間になれた、と振り返っている。それは新しい、自らが選び取ってゆく教育の一部であった。「私は今でも教育を信じよ

うと思っている。フロストの言葉をもう一度引用すれば、教育はものを見る角度を変えるのです。それは自分を新しい目で見直す手助けをしてくれるのです」(マイケル・パーカー『詩を作る』パルグレイヴ・マクミラン、83頁より引用)。次にあげた詩はヒーニーの「自分を改めて見直すための教育への信頼」をはっきりと示している。

ゲールタハト

モンヴェ

ねえ君 君とバーローと僕で

アトランティック・ドライブの ロスギルに帰って

もういちど1960年代に戻れたらいいのにね…

今の僕たちが あの頃の僕たちに会って

あの頃話していたことを 聞けたらいいのにね…

ヒーニーは「モンヴェ」が確かにディーンであると認めている。著者にとっては、この本を書くための調査にあたって、ひとつの魅力は、登場する人びとの姿や話を当時の背景に据えて見たり聞いたりできるということだ。特にヒーニーは年を重ねるほどに、子ども時代の頃や聖コロンバのことについてますます書くようになっていく。ディーンに捧げたもうひとつの詩はこう書いている。

私が6年間寄宿していた聖コロンバは

君のボグサイドを見下ろしていた

インタビューで触れられたもうひとつの詩「国境の戦い」は、隔離されて保護されていた若い寄宿生の描写から、政治的な国境が引かれて生まれた暴力への驚くほどの急転を描いている。

生徒たちは知性に対する自信に加えて、人間として自分に対する自信が必要だった。ヒーニーは故郷の農家で充実した11年間を送ったのだった。彼は

どんな知的な職業に就いたとしても、まさに今とほとんど変わらない自尊心を持ったことは間違いないであろう。「クィーンズ大学の教員に任命されたばかりだが、奨学金をもらったカソリックのイレヴン・プラス世代の一人として、(ヒーニーが感じたのは) ナショナリスト側のエネルギーと自信、そしてユニオニスト側における——いつもの頑固さと反動だけでなく——芽生えつつあるリベラルな考え方だった」(『発見者・保持者』、フェイバー・アンド・フェイバー)。

ヒーニーが朗読する詩のひとつ「期待する州」では、彼は「我々が生きている間ではなく」という古臭いフレーズを使っている。それは北のカソリック教徒が政治的遺産を表現するときに使っていた。それはアイルランド再統一への虹色のあこがれの終焉だった。このフレーズは今でも使われている。「北の我が同胞」は、今では南ではほとんど使われていない。それと同じように「私たちが生きている間ではなく」というフレーズは、世代を重ねるごとに現実的な目標というよりもあこがれに変わっているように思われる。「期待する州」は、ストーモント議会を棄権し空疎なフレーズを使うことをやめて「要求の新しい時代」へと成長してゆく姿を追っている。ヒーニーの詩の倫理的な深さがノーベル賞委員会によって賞賛されたことは驚くべきことでもない。コルターがいみじくも言ったように、この時代の歴史を作ったのは、人びとがこのような要求をし始めたときにその表にたったオースティン・カリーズとジョン・ヒュームのような人たちだった。

ヒーニーが1995年にノーベル賞を受賞した翌朝、『ガーディアン』の記者がヒーニーの弟の家の裏口にやってきて、兄のノーベル賞受賞をどう思うかと尋ねた。弟は「デリーがゲーリック・フットボールで全アイルランドで優勝して以来の快事だ」と答えた。(デリーは1993年に全アイルランドで優勝した)。

ヒーニーはあらゆる偉業を成し遂げながらも、地元深く根を下ろしている。ある晩遅く、デリー市内のパブで、聖コロンバの用務員に会った。この学校についてある本が作られたとき、本書が扱う時代も含めて何十年にもわ

たって用務員を務めた彼の前任については一言もふれられていないと言った。その後任を務める彼は、無視されたことが腑に落ちない様子だった。1950年代の聖コロンバの用務員は朝5時に起きて、学校の暖房のために火をたいた。彼は聖コロンバをいい状態に保っていくために疲れも見せずに働いた。だから新しい用務員は、胸のつかえを下ろすために、その手落ちを筆者に指摘した。前の用務員の名前はジム・ログである。彼のことはヒーニーの記憶の中にとどまり、追悼にひとつの詩をささげた。

MF：小学校でどのような教育をうけられましたか。

SH：最初教育を受けたのは、聖コロンバから40マイル離れたアナホリッシュ校でした。4クラスで先生が4人でした。先生4人の学校でした。先生は自転車で学校に通っていました。ま、19世紀の学校が20世紀なかばになってもまだ続けられているようなところでした。学校はカソリック教会の管轄でしたが、実際にはプロテスタント色も入っていました。入学者は地元のプロテスタントの家からも多く、ディクソン家、スミス家、イワート家、エリス家、クラーク家、ボール家などがそうでした。宗教的な派閥主義からくる毒々しい感じは全くありませんでした。ゲッター化した都会と違って、ここは田舎でしたからね。もちろん、その生徒はカソリック教会の教理の時間になると席を外していましたよ。通りを挟んで向こうに住んでいた一番仲のいい友達のトミー・エヴァンズもプロテスタントでした。分裂の国でありながら同時にコミュニティを重視した国でもあったのです。私は頭がいいとされていたので、先生にイレヴン・プラスの受験組に入れられたのです。それでイレヴン・プラスに受かってしまったのです。

MF：イレヴン・プラスに受かったときにどのように感じましたか。

SH：忘れもしませんよ。マーフィー先生が机の周りに生徒全員を呼び集めてから半クラウンをポケットから取り出してこう言ったのです。「いいかい、これはここにいるこの男にあげるんだよ。彼は奨学金をもらってデリーに行くんだ。だからこれは試験に受かった彼にあげるんだよ」。それは私にとって記念すべき一瞬でした。聖コロンバは40マイル離れたところがありました。山を越えるのは初めてでした。父と母と一緒にデリーに来た日は、心に焼き付く日でした。

MF：最初の日の思い出は何ですか。

SH：私たちは学校に入って行って校長先生に会い、入学の署名をしました。それは午後の3時か4時頃のことでした。規則では7時までは戻る必要はなかったので、車でブンクラーナまで行って、コンウェイ・ステュアートの万年筆を買ってもらいました。忘れることはありませんよ、12ポンド6ペンスの万年筆です。それはさらに高い状態へと進むときの儀式のようなものでした。さあ、おまえは万年筆の持ち主なのだ、というわけですよ。でももちろんその日の一番記憶に残っていることは、親が帰るときでした。両親が門に向かって歩道を歩いた瞬間、本当にひどいホームシックにかかって、悲しい喪失感を感じました。それを忘れることは決してありません。他に覚えていることは、初めての週末と初めてのハロウィン休暇です。それも1951年のことになります。家で週末を過ごしたあとで、家の前の道の先にあるバス停に行きました。ぼろぼろ涙を流して泣いていたと思うけれど、母は一緒でした。近所の方で、マック・ニコル夫人も来ていました。彼女はざっくばらんな物言いをする女性で、母にこう言いました。「まったくしょうがない女よね。泣いている子をそんなふうに突き放すなんて」。一番楽しかった思い出のひとつは、聖コロンバに入る前の夏に川岸で過ごしたことです。つい最近になって初めて父の気持ちが分かった気がしま

す。息子は行っちゃうなとうすうす感じていたのです。あまりしゃべることなくただ一緒に川岸に座っているだけというのも特別な交感になります。父親と息子がそんなふうをしているだけで、何かが静かに生まれ、流れでていったのです。幸せでした。

MF：あなたはかつて、最初の休暇で故郷に帰ったことについて書き、それが「他者としての母との初めての出会い」だと言いましたね。

SH：デリー市からはるばるマゲラフェルトまでは学校の特別専用バスで戻りました。それからサービスバスと言われたアルスター交通公社のバス（UTA）に乗り継ぎました。それで、普通は待合室で待っていました。初めて故郷に帰ったとき、母が入ってきました。何年か後にふと思いました。きっと、母は休暇に私が帰ってくるのが分かっていて、とにかくまず私に会いたかったのです。というのも家は狭くて、そのころはこどもがたくさんいたからです。ほんの少しでもいいから二人だけの時間がほしかったのだと思います。『息子と恋人』ですね。

MF：聖コロンバの最初の思いではどんなものですか。

SH：ただ管理の厳格さでしょうか。それから（それについてすでに書いている）大きな自習室と、ムチひもの恐ろしさです。全員が一行に並べさせられました。これまであの日行われたような高度に洗練されたむち打ちを見たことはありませんでした。その最初の日、間違いなく、心から恐怖感を感じました。家を離れてやってきて突然施設に入るのでからね。何週間もホームシックになりました。まだまだ弱かったし世間慣れもしていませんでした。泣きました。心の中で泣きました。でもあとには引けませんでした。

MF：あなたはいつも聖コロンバが宗教的な学校だと思っていましたか。

SH：ギリシア語をとったら、自分が聖職に向いていると思うということでした。フランス語をとったら、あのころ「世俗」と呼んでいたものを選択するということがあった。私はフランス語を選びました。でも、宗教的な施設にいるという事実は変わらなかった。朝はミサで始まり、夜はお祈りで一日が終わるのです——その場の雰囲気は宗教色一色でした。

MF：故郷を離れて寮生活をする中で、家族との別離感がありましたか。

SH：弟のパットがあとから聖コロンバに入学しました。それからダンもまたやってきました。しかし故郷を離れたのは私が最初でした。疎外感はありませんでしたが、家族とは違った方向に向かっているという気持ちはありました。

MF：あなたは1956-62年のIRA活動、「国境戦」のことを感動的に描いています。当時の様子はどのように記憶されていますか。

SH：1960年代にIRA活動がありました。聖コロンバでは新聞は手に入りませんでした。鉱石ラジオも禁じられていました。でも、そんなものは作ることができるもので、シーツをかぶって聞いていました。基本的には隔離状態にあったわけです。でも、マゲラフェルトで暴動が何かあったということは聞いていました。あの南デリーバスで到着して、町に入ったときに見たマゲラフェルトの裁判所の光景をよく覚えています。焼け焦げの痕があり、屋根には穴が開いていました。いわば、攻撃されたという感じでした。そして「攻撃」という言葉はそれまでとても抽象的だったのですが、その瞬間新しい現実性を帯びたのです

——これが危険だということが突然分かったのです。ニュース映画や本や写真以外で破壊的意図の現実を見たのはこれが初めてでした。

MF：英語の先生のS・B・オケリーにはなつかしい思い出があるようですね。

SH：ショーン・B・オケリーのクラスで読んだ本は良く覚えています。特に6年生のときに読んだ作家は覚えています。私たち4人はとても特別な授業を受けました——シェイマス・ディーン、パディ・マラーキー、マイケル・カツソーニ、そして私を入れて4人でした。それは私たちにとって大学1年生のゼミといってもいいようなものでした。彼のもとで読んだ作家は暗唱できるようになりました。ワーズワス、チョーサー、シェイクスピア、トマス・ハーディなどは、私にとって後々重要な作家となりました。しかも、オケリーの専門に対する鋭さは驚嘆に値しました。彼は大学の先生にもなれたでしょう。彼には内容に対しては学問的だけでなく感覚的なとらえ方もできました。それに彼は教育者であり、生まれながらにコミュニケーションの得意な人でした。また風変わりなところもありましたが、もちろんそれも欠かせないことでした。彼のあだなのひとつはホンク（ガチョウの鳴き声）でした。私たちはどの先生もみな神話化していましたが、オケリーは特別でした。彼はとても大股で歩くので、私たちはよくそのまねをしました。

MF：聖コロンバでは科学よりも人文学が重視されていたといってもいいのでしょうか。

SH：これらの学校は司教区の神学校でした。それでギリシア語とラテン語を教えずにはなりませんでした。人文主義的な観点から間違いなく語学に重点が置かれていました。大きな悔いのひとつは、歴史をもっ

と勉強しなかったことです。あとで歴史を読むこともできたでしょうが、学校で科目をとったほうが、おおよその方向が決まるし、とっかかりも得られます。

MF：寮生活であなたはどんな影響を受けましたか。大学への準備としての善し悪しはどうだったでしょうか。

SH：寮生活を送ると人間ができると昔はよく言われました。独り立ちができるようになるなどですが、確かに実際その通りでした。私はあの5-6年にわたり麻痺状態にさせられたのです。人を感情的に信頼することは許されませんでした。故郷を離れ、そこに入ると、世界ががらりと変わってしまったのです。しかしクィーンズ大学に行ったときには、私たちは一種のギャングでした。聖コロンバを出た生徒たちは一緒に座っていました。それから女の子に近づけるといふ、うっとりするような魅惑的な展開がありました。当時はまだまだおとなしいものでしたけれどね。クスクス笑いの修道院女子校の男試しのようなものがありました。アイルランド研究会、ゲーリック・フットボール・クラブもありました。これらのクラブは宗派や社会階級——派閥といういい方は強すぎる——によって分かれていきました。イレヴン・プラスのカソリック世代のことを表しているいい例がありますよ。マイケル・ケリーというカソリックの助司祭がいて、説教、朗読、祈りを行う信心会を毎週やっていました。しかし、ある時行われたちょっとした説教で、ゲーリック・フットボール・クラブやアイルランド研究会に固執しないほうがいいという助言がありました。ボート部にでも入って広い社会に出て中流階級のカソリック教徒になれ。ゲッターに駆けもどったり、急いで南デリー行きのバスに乗らないこと、というものでした。それは、その当時のあの世代にとってはあり得たことを示唆していたのです。積極的に出て行って、参加すること。こそこそ隠れる

な。気概を見せよ、ということだったのです。

MF：あなたはかつてアメリカのテレビで、(プロテスタントの) シャンキルと対立しながらフォールズ・ロードに育っていたら、少年時代はもっと違ったものになっていただろうと述懐していました。それについて少しお話ししていただけますか。

SH：ええ、私の家は幸いにも、宗派的な考え方をすることはありませんでした。私はそれを、父が家畜の売買で街に出ていたためだとよく考えました。家に来るたくさんの人びと、父の友達は、とにかく、オレンジ黨員でした。しかし、カソリックとプロテスタントの問題は、陽気に、上手に、また茶目っ気を含んだやり方で扱っていました。だからといってその問題がないわけではなかったのですが、品のある振る舞いのお手本を示していたのです。正直に言えば、必要なのはそれなのです。根の深い忠誠心と宗派的な考え方があると、それを取り除くことは難しいのです。しかし、品のある振る舞いができればかなりの進歩なのです。私たちが住んでいた状況の中でそれを学ぶことができました。

MF：聖コロンバであなたが出会ったデリー市出身の生徒たちのほうが、政治的にずっと洞察力があると思われましたか。

SH：聖コロンバに通っているデリー市の生徒たちは、政治化した宗派主義、つまりロイアリスト／リパブリカンという次元の事柄に対して私たちよりずっと敏感でした。彼らはもっと用心深くて、行動的で、いや、活動家だといってもいいほどでしたよ。またずっと冷笑的どころがありました。

MF：カソリックでいながらクィーンズ大学で教鞭を取るのとはどのような感じでしたか。

SH：60年代半ばから後半までのクィーンズ大学の教授団、つまり実際に教壇に立っていた教授陣は、ほとんどが（実際、現在よりはずっと多くが）イギリスの学者がしめていて、たいていは他の大学に行くための腰掛けでした。社会の水面下で行われていることには暗かったのです。リベラルで、陽気で、やや無菌的な雰囲気がありましたが、それは、腐敗的状况を扱うのにはとにかく、まだましな方法だったのだらうと思います。

その中で、一年目にジェイムズ・ジョイスを教材にして教えていたときに、何か変わったことをやっているなど感じたことを覚えています。60年代には、宗教的な話や政治的な話になると、私たちはたちまち小心者になるのです。それで、「ジェイムズ・ジョイスを読むときに、自分がカソリックであるとかプロテスタントであるということが問題になると思いますか」と聞いたら学生にちょっとショックではないかと感じたのを覚えています。そのような様々な現実は、とても微妙に存在し、かつ不安定な状況でした。大学の世界で私の世代が少しばかり沈黙を破ったのだと思います。思い切ったこととはいえませんが、私たちは沈黙をほんの少しだけ破ったのです。そして、ほんの少しだけ空間を作ったのです。文学を通じてではありましたが、現状について話す機会を少し与えたのです。教えることが影響を与えて、小さな変化を実現できるのだと信じています。

およそ10年ほどたってから、学校で同じクラスだった人たちを見回したときに、自分たちがひとつの世代だと実感できるのです。弁護士になった人もいますし、政治家になった人もいます。オースティン・カーリーはクィーンズ大学で知りましたし、シェイマス・ディーンとパトリック・マラーキーもそうです。ジョン・ヒュームは聖コロンバ

で知りました。彼は通学生でした。彼は夕方になると大きな自習室にやってきました。彼は寄宿生の勉強部屋に入る特権を与えられた初めての通学生だったので、きっと榮譽に浴するだろうかと、みんないつもそう感じていました。それはまさに榮譽でした。後になって、この生徒たちは皆動きだしたり、注目されていたり、主張を固めているといった感じでした。知的職業に就き、時流に乗っていきました。そうやってよかったと思います。

MF：これは最初の世代が世の中に出始めた瞬間ですが、具体的にはどのようなものでしたか。

SH：当時は、ユニオニストのコミュニティが主導権を握っていました。彼らは土地の所有権をもっている感覚でいました。土地だけでなく知的職業までも持っていると思っていたのです。ナショナリストは「我々はこの状態を受け入れられない」と考えました。彼らは距離を置き、政治への参加を嫌う傾向にありました。イレヴン・プラスのおかげで人びとはそれを受け入れることを覚えたのだと思います。というのも彼らは「そうだ、我々も構成員なのだ」と言い始めたからです。私もクイーンズ大学の一部だったし、北アイルランドの体制側の文化の一部になっていたのです。私は大学にいました。ある種の代表格であることの意識もありました。私の経験がシェイマス・デーソンと違う点はおそらく、彼はデリーに戻ってデリーで教え、修士号をとり、それからケンブリッジに行き、ケンブリッジ卒業後はアメリカに行きましたが、私はベルファストの体制側にまた入ったということです。私はBBCのプロデューサーと面識がありました。サム・ハンナ・ベル、ジョン・ボイドも知っていました。私はBBCによく出入りしていました。芸術協会に出入りし、美術館に出入りし、クイーンズ大学に出入りしてもいました。それをやめたのは、それはただ、文筆活動に勢いがつ

いて、もうそこから抜け出て、自分も作家としてやっていく時期が来たという気持ちにさせられたからです。

MF：では1947年の衝撃はどんなものでしたか。

SH：1947年の教育法以降は実力次第で奨学金がもらえるようになりました。教育法とイレヴン・プラスがもたらした違いは、実力や才能のある人に奨学金が与えられるということでした。それによって、才能だけでまったく新しい人びとが前線に立てることができるようになりました。その結果、労働者階級や農家育ちの人びとが教育を受けて成人層に入ると、これまでになかった批判的な知性と向上への意欲が動き始めたのです。冒険心とともに、可能性や有利性、社会を再生する感覚を持つ世代だという自覚もありました。彼らのように優位な立場に恵まれなかった自分の家族や近所の人たちのことも知っていました。責任感が強かった分、彼らは政治的でもありました。それはヒュームやオーステイン・カーリーを見ればよく分かりますよ。

MF：あなたの成功には聖コロンバはプラスかマイナスのどちらでしたか。

SH：どうでしょうね。そこで教えられた多くのことは、故郷から出てきた私の中にあるものをただ組み立て直したただけでした。ただ、悲しみから確信へ、ある種の自立ないしは個性形成への変化の過程はありました。それは間違いのないと思います。

MF：あなたは弟さんが亡くなった日の朝、学校の保健室で待っているように言われたそうですね。聖コロンバは、そういうときこそとりわけ無機質な冷たい所に見えたのではないのでしょうか。

SH：クリストファーの事故の話聞いたあの朝は、ミサの奉仕に出ています。ナザレの家でミサの奉仕に行くことはひとつの特権でした。暖かい朝食も食べられたのです。私は学校の正門に向かって歩道を歩いていました。校長先生の部屋に連れて行かれ、クリストファーが車にはねられて死んだということを聞かされました。それから保健室に連れて行かれたのです。私はただそこで待っていました。もちろん悲しくてうちひしがれていました。捨てられた孤独な子どものようでした。結局、車で家に送ってもらいました。その日、車に乗せられて小さな畑を通り過ぎました。その後何年もの間、その畑を通ると、そのことを思い出し、いつもその瞬間に戻っていきました。

中間期の休暇

僕は午前中ずっと学校の保健室にいて
 授業終了を告げる鐘が鳴るたびに数えていた
 二時に近所の人たちが家まで車で連れていってくれた

玄関で僕は泣いている父親に会った——
 父が葬式で動じることはそれまでなかった——
 ビッグ・ジム・エヴァンズが きつい一発だよな と言った

僕が入っていっていくと
 赤ん坊がくっくっと笑い 乳母車を揺らした
 老いた男たちが立ち上がって僕に握手を求め

「とんだことで おかわいそうにね」と言われてまごついてしまった
 見知らぬ人たちに 僕が長男で 学校に行っていると
 ひそひそ話で教える声が聞こえる 母がその手で僕の手を握って

怒りに涙もかれて 何度も咳をしてため息を吐き出す
十時に救急車が到着して
死体を運んできた 看護婦たちに血止めと包帯をしてもらっていた

翌朝僕は部屋に行った スノードロップと
ろうそくが枕もとを和ませていた 僕は弟を見た
六週間ぶりだった 前より青白い顔になって

左のこめかみに芥子の花のような傷を負っている
弟は自分のベッドにいるように四フィートの箱に横たわっていた
はでな傷跡も残さずに、バンパーがきれいにはねたのだ。

四フィートの箱、一年に一フィートだ。

MF：聖コロンバにいて修道院の長い伝統を理解することができたことで、あなた自身の個人的な経験に神秘的な側面ができたと感じていらっしゃるようですが、それについて少し詳しく話していただけますか。

SH：聖コロンバ学校の寄宿生としての経験は、基本的には、西暦400年から1940年ないしは50年までのヨーロッパのキリスト教文明の経験と同じものでした。あのような学校では、生活が鐘で規制されていました。基本的に宗教的な生活がありました。教典に従った一日の生活は自習室と礼拝堂と食堂で守られていました。それを体験したことは、歴史的なヨーロッパ文明に深く参加したことを意味します。これはちょっと大げさな言い方かもしれませんが、その通りだと思います。

MF：今日学校に戻られて、どうでしたか。

SH：私はちょっと前に「来世」という詩を書きました。そして、エリシアン（浄土）にいるのではなくて、ジム・ローグの後を歩いている姿を想像しました。彼は用務員で廊下掃いたり、古い食堂や古い回廊のような、幽霊が出るひっそりとした所に入っていくのです。これは死後の霊的存在でありながら、とてもなじみ深い、そして同時にまったく不思議な経験になると思います。それが今日ここに来て、あの回廊を歩いているときに経験したことです。

(ヒーニーの朗読)

肉体と魂

1 あの世で

それは 学校の床屋が二週間に一度開かれる
 あの教室の床に落ちている 僕たちの髪の毛を掃きに行くときの
 用務人のジム・ローグの後から 持ち場を回るときの彼の足取りに
 合わせながら ついて行くような感じだろう
 見回るのは 寄宿舍とひっそりとした踊り場
 紋章付きのどっしりとした陶器が並ぶ食堂
 一階の廊下 洗濯物の山
 靴直しのために名札のついた革靴 名札のあの名前は
 君の名前なのか 君は肉体なのか魂なのか

MF：「期待の州」も読んでいただけますか。

SH：(ヒーニーの朗読)「期待の州」より

1

私たちは願望*のただよう土地にどっぷりとつかって生きた
 空高く 幾層にも重なったあきらめの雲の下で
 生きている間には無理だという言葉に 喪失感がかさかさと鳴った
 お情けやかたじけないご下賜を請うて くじけてしまったことは
 りっぱではあったけれど、その日としてはそれで十分だった

一年に一度 私たちは野原に集まり
 ダンスの舞台を作り テントを張った
 そこで子どもたちは
 丸暗記したゲール語の歌を歌った
 仲間とともに戦ってきた競売人は
 私たちがいつも当然だと思っていた
 屈辱の数を数え上げた しかし、その彼でさえ
 これを 行動への呼びかけだとは思わなかった
 拡声器の鉄の口が空気をふるわせたが
 誰も非難されたとは思わなかった 彼は私たちに堅信の秘蹟を授けてく
 れた

反抗の歌が演奏されて閉会を知らせて
 家路に向かうと 超過勤務の兵士たちに
 いつものように 嫌がらせをされた

2

それから次に起こったことは 突然だが この叙法の変化だった
 新しく電気を引いた台所で 本が開く
 人生をぼんやりと過ごしてきたはずの若い頭が
 乳牛の脇腹から離れて 忙しく 所定のテキストに

* Optative

初めて自分たちの街道を舗装したり 描いたりしている
 次に 四角形の敷石がやってきて それから命令法の
 文法 新しい要求の時代がやってきた
 この世代は条件法を永遠に追放してしまうだろう
 彼らは 深き淵からの叫びが秘めた勝利に対して
 生まれつき無感覚なのだ
 我慢の果てに勝利があるのだ という私たちの信仰を
 彼らは異端とし、知性を
 輝くパールのようにして、不作法にふりまわす

3

最強と見えるものが 時代に置いていかれた
 下から支えられたものにこそ 未来はある
 私たちが 諦念という守護天使である
 秘密の保護者の庇護の下で
 暮らしていたときに 確証を与えてくれたものは
 今 私の肩に脅威の毒牙を食い込ませる
 私は「うちひしがれた」という言葉を自分に向かって繰り返し
 真鍮色の稲妻に縁取られてゆく
 積雲の下で 帽子もかぶらずに立っている
 化石と化した板に 槌が打ち下ろされる音
 権杖を打ち込む時の 妥協を許さぬ音を切に望み
 本能が正しいと命じたすべての行為から
 決して外れぬ一人がいることを
 直説法で一歩も引かぬ人があることを
 洪水のとき 必ず舟が浮き上がる人があることを知りたい

(Optative はオクスフォード英語辞典によれば、「動詞の法について、

特にギリシア語で、願望を表し、意味的には英語の let's あるいは if only と同義])

MF：北アイルランドの発展はそのように見えますか。

SH：ええ。政治の世界の三段階にわたる発展です。

MF：寓話ということですか。

SH：まさに寓話です。まず第一に、非分裂主義的な立場の寓話です。つまり中立の立場です。ストーモントに行かない、ナショナリストの政治集会に参加しないという立場です。それから、次の局面です。公民権、つまり要求の世代です。もう譲歩はしない。もう「あとで」を許さない段階です。次には、第三段階、その結果としての暴力と危険の時代、「打ちひしがれた」という単語と稲妻の時代です。次には、仮定法ではなく、直説法への正直さへと脱出したいというあこがれです。突然の豪雨にボートは浮くものです。この詩は語っています。危機が起こり、ある種の——アルマゲドンではなくて——恐ろしい暴動が起こるので。でもそれと同時に、それを耐え抜いてこそ何かもっといいものをつかむのです。それは洪水を逃れたノアのようなものです。

MF：それを成し遂げたのはあなたの世代だと思われませんか。

SH：いえいえ、私たちの世代がそれを成し遂げたなどとは思いません。私たちの世代は1970年代、80年代、90年代に、洪水にのまれてしまいました。私自身は60年代の、たぶん50年代の世代にあたるでしょう。60年代というよりも50年代だと思います。60年代の感覚は、北アイルランドでは事態が変化しつつあるというものでした。私たちの世代は政

治的な変化の一部だったのです。私たちは自分の意見をはっきりと述べていました。事態は動きつつあったのです。それから、事態が激しくなっていくって、徹底的に変わりました。そして、あの社会改善の考えも変化して、何かずっと過激になりました。ゆるやかに改善していこうという考えが消えて、メロドラマと危険が入り込んできたのです。